様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０１３１

研究課題名（和文）天神在地縁起の研究

研究課題名（英文）Study of the image of TENJIN Legends peculiar to each area

研究代表者
鈴木　幸人（SUZUKI, YUKITO）

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号：３０３７４１６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：「天神在地縁起（在地説話）」（各地域、各天満宮に独自の縁起説話）に関わる造形作品についてデータの収集につとめた。
とくに、各地の天満宮に関わりをもった松浦武四郎の活動に着目して、その作成になる双六、「聖跡二十五霊社順拝雙六」について、天満宮の選択、図様の源泉等の観点から分析考察を試みた。また掛幅形式の天神縁起絵の未紹介作例として「京都・吉祥院天満宮十二幅本」について、その独自要素、図様の特質等を指摘して、同本が太宰府系縁起絵と弘安本系図様の複合的な作例であり、従来知られていない近世期における掛幅縁起絵の存在を示唆するものとの見解を得た。

研究成果の概要（英文）：I strove to collect the image of "Kanko(Sugawara Michizane) " in many genres. So I made an effort toward collection of data about a visual work of an peculiar origin story in each area and each Tenmangu.
In particular, I aimed at Takeshirou Matsuura with concerning in Tenmangu in all partand tried an analysis and consideration from the angle about the source of view and composition of sugoroku(Japanese parcheesi, "sugoroku of 25 sacred remains") . I showed the characteristic of the original story and the composition of Tenjin-engi of the Kisshouin Tenmangu possession . And I'm thinking that suggests existence of a group of the Tenjin-engi picture.

研究分野：美術史

キーワード：天神信仰　在地縁起　掛幅形式縁起絵　綱敷天神像　松浦武四郎　天神双六

１．研究開始当初の背景

「天神信仰」は、菅原道真（845‐903、平安時代の文人・政治家）を祭神に中世から現代にいたるまで信仰を集めてきた。林屋辰三郎氏の指摘があるとおり、「神格の変容」と「在地縁起の成立展開」に認められる、地域ごとに特色ある信仰形態を生みながら、享受層を変化拡大させる点に、他の神祇信仰には見出しがたい独自色をもつといえる。

こうした天神信仰が生み出した多様な造形について、個別ジャンル（絵巻、神像、画像、渡唐天神像…）の研究がなされデータの蓄積がなされてきたが、その総合的研究（実在の人物でありつつ天神として祀られる菅原道真、菅公が、美術文芸等においてどのように造形化されたかを総合的に考察する「菅公イメージの系譜研究」）は、近年ようやく緒に就いたところである。「天神在地縁起の研究」は、各地域に伝承される独自の天神信仰説話に着目しそこに造形化される菅公イメージを探ることをめざしたい。

２．研究の目的

天神信仰の最大の特色は「神格の変容」と「信仰の地域的磁場の形成」とであると考えられる。それを眼に見えるかたちに明示する「在地縁起」および「天神道真の姿」の成立と変容に注目し、「菅公イメージ」が、どのように語られ、造形化されてきたのかを分析、考察したい。

研究代表者が編集制作に関わった『太宰府系天神縁起絵の世界』（2012 年、太宰府天満宮文化研究所）は、近年の調査で発見した掛幅形式縁起絵の作例を多数紹介し、太宰府地域独自の天神信仰にもとづく縁起絵の特質と系譜をはじめて本格的に紹介できたものとなった。「在地縁起（ご当地説話）」を核とする天神縁起絵およびそこに現れた菅公イメージの解明と位置づけに一定の成果があったと思われる。（文神、忠臣、客人の要素が互いに支えあい融合する、と今のところ結論している。）しかし、いまだ「天神在地縁起」と「菅公イメージ」の関連の全貌を把握するにはいたらず、関連データ収集も不十分であり、その視点から継続的に発展させていきたいと考えている。

ひとつは、近世から近代の菅公イメージは、「近世のご当地縁起」（なかでも「道明寺説話」、「綱敷天神説話」）を足がかりとして形勢される、と考えられることである。このような観点から、以下の分野の作品を対象としてデータを収集、調査分析を行う。その分野は、近世の天神縁起絵（在地説話を含む）、文芸（読本、絵本、講釈）、演劇（浄瑠璃、歌舞伎、とくに「菅原伝授手習鑑」の演出の変容は当該研究に重要な視座を与えるはずである）、近代絵画（これまで菅公・菅原道真を主題としての研究は管見におよばない）である。またとくに、近代の教育出版物（教科書、絵本）は、「忠臣・道真」のイメージ形成（すなわち近世からの変容）に最も大きな影響のあるものと考えて、そのデータ収集につとめたい。（これも現在まで未開拓の領域といえる。）

また一方、幕末の探検家・文人の松浦武四郎の天神信仰にかかわる活動も、近世から近代の過渡期にあって、天神信仰の特質や変容を考察するうえで看過できないと考えられる。とくに在地縁起の観点からも、「聖跡二十五霊社順拝雙六」（武四郎双六）の詳細な分析、考察は欠かせない。双六の図様の源泉や鳥瞰図的な構図などについて考察を行いたい。

以上の作品群についての考察から、近世・近代の菅公イメージを明確にするとともに、その間の差異について、その様相および背景となる思想を指摘することが、本研究の達成すべき事柄である。

３．研究の方法

上記の目的に照らして、研究目的で述べた調査の対象作品について、資料収集、データ収集、現地調査、読解・分析を行う。とくに、「道明寺鶏鳴説話」「明石駅長説話」「綱敷天神説話」「水鏡天神説話」のデータの収集分析を行い、対象作品の翻刻、註釈作業を行う。また「吉祥院天満宮の掛幅縁起絵」、「松浦武四郎の双六」、「綱敷天神像」について調査分析を進める。

（１）吉祥院天満宮の掛幅縁起絵
太宰府系天神縁起絵、掛幅形式縁起絵のデータに照らして、場面の同定を進めるとともに図様の典拠等について分析を試みる。

（２）松浦武四郎の双六
「聖蹟二十五霊社」の選択について、武四郎の紀行文等書籍を参考に考察するとともに、各天満宮の描かれ方（図様、構図等）を、天神縁起絵、近世の名所図会、および武四郎自身のスケッチとの比較考察によって考察する。

（３）綱敷天神像
これまでにも画像データ収集につとめてきたが、近世の版本、近代の絵本、また演劇関係にも図像データ収集の枠を広げる。近世には彫刻作品も見られるようであり、存在を知った静岡県富士宮市の綱敷天神坐像について実見調査を行う。
また各地の「綱敷天満宮」についてもその由来を調査したい。

４．研究成果

（１）研究成果の概要

①実地調査等

本研究課題の実施期間にわたって、新出資料もふくむ「天神在地縁起」データの収集を行い、各地の天満宮、及び関係社寺、地域への実地調査につとめた。

そのための実地調査は、2012 年度に東京、京都方面等、計 5 回、2013 年度に関西、東京、山口方面等、計 5 回、2014 年度には山口・福岡、関西、東京方面、計 4 回行った。主な調査実施場所は以下のとおりである。松浦武四郎記念館（三重県松阪市、武四郎双六関連資料）、富士宮市岡路八幡宮（綱敷天神坐像調査）、京都市・吉祥院天満宮福岡・綱場天神、水鏡天神、榎社、京都・菅原院天満宮、山口国分寺、防府天満宮、埼玉・鷲宮神社他

②作品研究

実地調査をふまえて、とくに松浦武四郎制作の天神双六、吉祥院天満宮本縁起絵に関して、詳細な分析と考察を試みた（詳細後述）。

③古典芸能関係資料の収蔵分析

故市川寿憲氏収集にかかる古典芸能（人形浄瑠璃、歌舞伎、落語等）関係の書籍・映像資料を収蔵し分析を行った。これは当初の研究予定には組み込まれていなかったが、古典芸能演劇における菅公イメージ調査の一環であり、縁あって収蔵できた膨大な書籍映像資料の調査整理分析を行った。それをとおして、近代の演劇における菅公イメージの資料収集についても着手できた。とくに綱敷天神と近代の歌舞伎演目（「菅公」）の関連を現在調査中である。

④天神縁起絵巻、版本等の詞書翻刻

実見調査した縁起絵巻や版本類の詞書の翻刻作業を引き続いて行っている（対象作品は絵本菅原実記、天神一代記図会、天満宮御伝記略等）。

（２）松浦武四郎「聖跡二十五霊社順拝雙六」（武四郎双六）について

すでに山口県立美術館『防府天満宮展図録』（2011 年）において幕末期の文人・松浦武四郎の天神信仰の意味について論じたことあるが、それを拡充発展させて「武四郎双六」解読を試みた。

それらの一端を二つの研究発表（北海道芸術学会例会ポスター発表、「双六・巡礼・天神信仰」、2013 年 3 月 17 日、および美学会東部会「松浦武四郎と天神在地縁起―「聖跡二十五霊社順拝双六」をめぐって―」、2013 年 9 月 28 日）において述べた。その概要を以下に記す。

「聖跡二十五霊社順拝雙六」（武四郎双六）は、松浦武四郎（1818-1888、伊勢の人）晩年の制作になるものである。武四郎は、幕末に蝦夷地調査を行い、明治期には開拓使役人となって、一般には北海道の名付け親として知られている。生涯日本全国を旅して多くの紀行文を残し、晩年にも富士登山、大台ヶ原踏破を試みるなどの活動が伝えられるが、天神信仰に篤く、各地の天満宮参拝、神鏡や石碑の奉納、「聖跡二十五霊社順拝雙六」制作の実践的な活動が注目される。武四郎が晩年、明治 19 年（1886）に制作したとされる絵双六「聖跡二十五霊社順拝雙六」（仮に「武四郎双六」と呼ぶ）は、京都から博多まで、25 ヶ所の天満宮に 7 ヶ所の所縁の場所をくわえて 32 区画を埋め、道真誕生から太宰府へ左遷配流、北野社への菅霊還御という天神縁起を軸に天神信仰にかかわる説話を織り込む。この 25 ヶ所の天満宮には、武四郎の発願によって神鏡・石碑の奉納がなされており、そこからも武四郎の天神信仰に託した思いを読み取ることができる。武四郎双六をめぐる諸問題を、松浦武四郎論と天神在地縁起論とが交差する点ととらえ、以下のような見地を得た。

第一に、武四郎双六の場面選択について、25 霊社と他の聖跡の選択を武四郎の紀行文から考察した。

第二に、図様について、先蹤の天神縁起絵、名所図会、紀行文挿図と比較し、それまでの図像を総動員して図様形成がなされたこと、と同時に武四郎自身の実景観察、スケッチ制作の果たした役割が大きいことを確認した。

第三に、双六の袋に描かれた絵図については、それが西国天満宮鳥瞰図というべき、京都上空から九州太宰府方を見晴るかす構図に各地の天満宮が描き込まれるものであり、武四郎の奉納神鏡における北方や西海までを描いた図柄とも軌を一にする。

こうした点から、天神在地縁起を重視する傾向が、武四郎自身の踏破、巡礼という行動をとおして、雷神や学問神ではなく御霊信仰としての天神縁起に組み直されることが了解された。と同時に、武四郎の各分野における様々な実践もまたこの天神信仰の位置づけが示唆するように、国境や国のかたちへの意識と結びついていること、―それは武四郎における北海道の位置づけとも関わらざるを得ないだろう―、もまた透けて見えるのである。

なお天神関係の双六に関してその他の作例も調査しているが、京都の某家所蔵になる幕末の北野天満宮における九百五十年万灯会にあわせて制作された「北野天満宮参詣双六」も実見調査することができた。当時の北野社境内周辺の賑わいが双六形式で描かれ、版元等も判明する貴重な作例といえる。

（３）吉祥院天満宮「十二幅本天神縁起絵」（掛幅形式の天神縁起絵）について

以前に編集に参画した『太宰府系天神縁起絵の世界』（2012 年、太宰府顕彰会）は、近年の調査で発見した掛幅形式縁起絵の作例も多数紹介されて、太宰府独自の天神信仰にもとづく縁起絵の特質と系譜をはじめて本格的に紹介できたものであったが、今回新たな未紹介作例を調査報告する機会を得た。

京都市南区に鎮座する吉祥院天満宮に所蔵される掛幅形式十二幅本天神縁起絵がそれである。その概要を示せば、法量 172.7 ㎝×60.6 ㎝、材質は紙本着色 12 幅、画面上に作者・制作年代を示す記載はなし、裏面に墨書等もないがその画風様式から制作は 18 世紀半ばが想定される。第 1 幅、第 2 幅に描かれる吉祥院天満宮ご当地説話から、当初より同宮に伝来したものであることは疑いを入れない。全 12 幅、110 場面からなる。その構成は以下のとおりである（未確定の場面等あるため暫定案とする）。

第 1 幅（3 段 3 場面）：吉祥院創建説話（清公卿説話）
第 2 幅（5 段 12 場面）：道真の誕生（幼少化現～羅生門鬼）
第 3 幅（5 段 12 場面）：道真の栄達（誉田参籠～時平讒奏）
第 4 幅（5 段 10 場面）：左遷配流（左遷宣旨～榎寺姥）
第 5 幅（5 段 11 場面）：大宰府配所（恩賜御衣～薨去）
第 6 幅（5 段 7 場面）：菅霊活動（安楽寺埋葬～時平抜刀）
第 7 幅（5 段 9 場面）：菅霊活動（尊意渡水～公忠奏上）
第 8 幅（5 段 9 場面）：菅霊活動・天満宮創建（清涼殿落雷～太政威徳天）
第 9 幅（5 段 9 場面）：天満宮創建（日蔵六道～太郎丸託宣）
第 10 幅（5 段 10 場面）：天満宮創建・北野霊験譚（右近馬場相議～世尊寺仁俊）
第 11 幅（5 段 6 場面）：北野霊験譚（西念往生～銅細工師姉妹）
第 12 幅（5 段 10 場面）：太宰府霊験譚

その特色は以下の 3 点にまとめることができると考えられる。

（a）吉祥院天満宮のご当地説話

第 1 幅、第 2 幅に同宮ご当地縁起が描かれる。「清公卿吉祥天女信仰」「生母伴氏吉祥院参籠」は他の天神縁起絵に類例のない場面、図様であって、吉祥院天満宮の「ご当地説話」である。とくに第 1 幅全体に同宮の創建説話、自宮の現在の景観を描くのは、大阪・菅生天満宮掛幅本（12 幅、18 世紀半ばの制作、太宰府系縁起絵の他地域での作例と位置付けられる）と同様の形式といえる。

（b）太宰府系説話の採用

しかし近世期の掛幅形式天神縁起絵の例として、太宰府系縁起絵にしばしば描かれる説話、すなわち、左遷途上説話（綱敷、水鏡）、配所説話（榎寺老婆、針摺石、鯰石）、および第 12 幅に太宰府霊験譚（琉球林大夫、鰾証文）もあわせて描かれている。とくに太宰府霊験譚のうち、「藍染川」は謡曲によって人口に膾炙した太宰府説話であるが、これが縁起絵に描かれる例は管見におよぶところがない。

（c）弘安本系図様の採用

しかしながら、吉祥院本の注目すべき点は、その図様にあると思われる。すなわち物語展開上主要な場面に「弘安本系」の図様が用いられる点である。たとえば、「西下陸路」においては「洗濯の女、女児、赤ん坊」の 3 人の特徴的な図様は、弘安本（および根津本、宮内庁 6 巻本、福岡北野本）に共通する。また「安楽寺埋葬」では松崎本等、弘安本系の図様が用いられ、とくに佐太文安本との関連が注目されるなどである。同じ掛幅形式の縁起絵でも太宰府系諸作品には、弘安本系の図様が採用されることはほとんどなかった。吉祥院本が、その所在地の点からも、京都での制作が予想されるが、中世以来の北野天神縁起絵巻の正統的図様を用いて描かれることは、太宰府系と弘安本系の複合的な性格を示し、いまだ知られていない太宰府系以外の掛幅縁起絵の存在を予想させる。また吉祥院本は、主要場面の構図の巧みさも看過できない。近世の天神縁起絵制作の様相を知る上でも重要な作例といえる。

（４）岡路八幡宮「綱敷天神坐像」について

綱敷天神像できわめて特異な図像、像容をもつ作例が知られるところとなった。静岡県富士宮市の岡路八幡宮に伝来する木造の綱敷天神坐像である。木造、寄木造、玉眼であって、全面に黒漆による塗り直しがある、当初は彩色像であったかと思われる。制作年代は江戸時代、18 世紀前半と考えられる。総高（綱の高さ含む）35.0 ㎝、像高 32.5 ㎝。台座の裏に墨書があり、それによると、山本八郎右衛門・源幸光が享保 19 年（1734 年）、駿河國冨士郡山本村の先照寺に、先祖である山本弾正貞久にゆかりがあるために奉納したものであるとする。また全面に黒漆による塗り直しが施されている。現状では彩色は確認できなかったが当初は彩色されていたものと思われ、漆による塗りは、坐像裏面の墨書にある「再興」の折り、「雨宮利京」によるものかと推測される。「雨宮利京」については、詳細を知りえないが、関西大学「近世仏師事績データーベース」にその記載がある。

綱敷天神像の遺品は主に画像であり、木造の坐像は希少である。それにくわえて、とくに本像は、綱座（綱を巻いて拵えた敷物）の端を左手に持つという、管見の及ぶところ他に類を見ない図像を示す。制作当初よりこの

図像であったと思われるが、いかなる図像的な典拠や根拠があるのかいまだ詳細は不明ながら、きわめてめずしい作例として貴重なものといわざるをえない。

（５）今後の展望

在地縁起に関わる造形作品について、さまざまな分野にわたる調査およびデータ収集を続けてきたが、松浦武四郎の双六に描き出される、二十五の霊社聖跡という、近世から近代の過渡期における天満宮の再編成という観点から、その中で、それぞれの在地縁起、およびその造形作品がどのような位置を占め役割を果たしたのか、ひいては天神信仰の変容について考察を深めてみたい。

なおその際、菅公の神格が多様であること、荒神、怨霊、文神、忠臣という複数の側面をもつこと、また私見によれば、菅公が客人（マレビト）の機能をもつことによって（これが在地縁起の契機となると考えられるのだが）、それらの諸神格は互いに排除せずかえって支えあってひとつの神格を形成する、そうした他に類を見ない神格のあり様とその造形化と流布の様態が明らかになるだろう。それを逆にみるならば、日本の神祇信仰と芸能のあり方を考察することにも直結する視点となると考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

① 鈴木幸人、「フランス国立ギメ東洋美術館蔵・太政威徳天縁起―天神縁起絵の系譜における位置―」、『長岡天満宮資料調査報告書 美術・中世編』（長岡京市文化財調査報告書第 63 冊）、p.42－43、p.114－121、長岡京市教育委員会、2012 年 11 月、査読無し

〔学会発表〕（計　２件）

① 鈴木幸人、「松浦武四郎と天神在地縁起―「聖跡二十五霊社順拝双六」をめぐって―」、2013 年 9 月 28 日、美学会東部会、北海道大学（北海道・札幌市）

② 鈴木幸人、（ポスター発表）「双六・巡礼・天神信仰」、2013 年 3 月 17 日、北海道芸術学会、北海道立近代美術館（北海道・札幌市）

〔図書〕（計　１件）
①　（共著）鈴木幸人、『三重県史 別編 美術工芸（解説編）』、「北野天神縁起絵巻」、p.154－156、2014 年、編集発行三重県

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

研究会報告
①鈴木幸人、「資料紹介 京都・吉祥院天満宮所蔵十二幅本天神縁起絵について」、2015 年 2 月 14 日、松崎天神縁起絵巻研究会、防府天満宮（山口県・防府市）

②鈴木幸人、「天神在地縁起に関する諸問題」、2014 年 2 月 15 日、松崎天神縁起絵巻研究会、防府天満宮（山口県・防府市）

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木　幸人（SUZUKI　YUKITO）
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：３０３７４１６９

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし